

第 123 号

副会長挨拶
三教研に望むこと
調査委員会報告
授業力養成講座
研究大会の報告
研究校紹介（豊川支部）
学校自慢（豊橋支部）
支部トピックス（刈谷支部）
教室の窓から（豊田支部）
教育随想



「おぢいさんのランプ」の巳之助に学ぶ

三河教育研究会 副会長
鈴 村 富士子



「お前たちの時世はすぎた。」「電気の時世になった。」と言いながら割っていきました。三番目のランプでは涙が浮かび狙いを定めることができませんでした。それから、巳之助は潔く商売をやめ、本屋になりました。

私が教員を務めたこの三十八年間、学校ではいろんな改革がありました。「週五日制」「生活科」「総合的な学習の時間」「特別支援教育」「食育」など。さらに今は、「道徳の教科化」や「英語教育改革」なども加わっています。この国の未来を創っていく子どもたちに身につけさせたいことが山ほどあることは、よくわかります。

しばらく前から新美南吉の童話『おぢいさんのランプ』の最終場面が頭から離れません。ランプ売りをしていた主人公の巳之助が、ランプはもう時代遅れと気づき潔く商売をやめる場面です。巳之助は、家にある五十くらいある全てのランプに火を灯し、池の淵につるし、長く見つめます。やがて、

そして一方では、「多忙化解消プラン」です。学校は、また大きな変革を迫られています。学校の本来の目的は何でしょう。か。福沢諭吉が『学問のススメ』の中で「学校には使命がある。学校の名誉は教育内容が高尚であること。教え方が巧みであること。学内の人物の品行が高く議論が低劣ではないことによるのだ。」と述べています。私は迷った時、この言葉に立ち返り、考えることにしています。

若い先生たちの姿に感激したことが、何度かありました。研究発表会後、「よい実践をしたのだから、授業者全員、研究論文を書こう。」と、研究部の先生が職員室で呼びかけていたこと。新任の時、学級経営で苦労した先生が、周りの先生の指導を受けて成長し、数年後の研究発表会で見事な授業や学級経営を見せたこと。校内の若手研修で講義をした校内のベテランの先生のノート指導や学級経営を若い先生たちが実践し、学び合いの気運が高まったこと。そんな時、私は喜びを感じると共に、次世代の先生たちは育ってきていると確信しました。

巳之助の姿に学ぶ事は、「潔さ」であり、これからの世の中を見抜く「先見性」です。若い頃、先輩の先生方に言われた「今の若い先生たちは」という言葉。その私たちが、ここまでの時代を作ってきました。そしてまた、次の世代にバトンを渡そうとしています。若い先生たちの可能性を信じ、これからの活躍に期待したいものです。



今こそ「教科の本質」を明確に

三河教育研究会 副会長
高 須 亮 平



次期学習指導要領が公示されて一年になります。現在、「主体的・対話的で深い学び」という言葉は教育現場に浸透しつつあります。この三河地区では、これまで「子ども主体」や「かわり合い」といった研究は、課題はあるものの進められてきました。しかし、「深い学び」についてはやや曖昧になっ

ています。それは、教科の要素的知識をバラバラに教えている面があると思うからです。それでは「深い学び」に至ることは難しいかもしれません。子どもたちが、その教科ならではの「見方・考え方」でその世界を眺め、つながりをもつて理解できたとき、つまりはその教科の本質を統合的にとらえられたとき、教科の「深い学び」は明らかになると思うのです。

そういう意味で、今こそ「深い学び」に向けたそれぞれの教科の本質を明確にしていけることが求められるのです。それには一つ一つの教科の単元・学習内容に系統的に、子どもの側から見直すことが必要です。表面的な内容は違っていても

統合的に考えればつながりが見えてくるものがあります。それを子どもたちの学びとして位置づけるのです。そのような教科ならではの「見方・考え方」を次期学習指導要領が学力論の基底に据えている以上、私たちにとって不可欠な営みとなります。それを三教研の各教科部会等の実践研究として提案されれば最高です。

教科の「見方・考え方」、内容の系統は、既有知識・経験は大切ですが、次にどのような学びが期待されるかを見通しておけばそんなに難しく考える必要はないでしょう。例えば、算数・数学科ならではの「帰納的な見方・考え方」で言えば、小一の数の合成分解で、「とらで10、とらで10……」を学んだ子どもは、「構成する二数のうち一方の数がある数増えれば他方がその数と等しい数だけ減る」ことに帰納的に気付くでしょう。そうすれば、後の学習の「 $28+35$ 」では「 $(28+3)+35=30+35=65$ 」とその見方・考え方をうまく活用することができま

す。そのような内容の広がりを「見方・考え方」から確認してみると、「深い学び」につながる要素は見えてきます。その中では、自ずと算数・数学科ならではの「見方・考え方」とはどういうことか、それを子どもたちが学び、生かすとはどういうことかについてつながりをもって把握できます。そのような教科の本質的なことに触れることができれば、「深い学び」に向けた、私たちの指導力は確実に向上していくことでしょう。

三教研に望むこと

三河の風土に根ざした 確かな歩み

岡崎市立大樹寺小学校

田中 俊二

全国連合小学校長会研究協議会をはじめ、全国レベルの研究会に参加してみると、学校運営や教育研究活動など、その取り組みや考え方が地域によって様々であると感じます。それは、それぞれの地域に根ざしたものであります。

三河教育研究会は、「三河の風土に根ざし、子どもを中心に据えた教育」をすすめています。「実践に学び、実践を創る」その確かな歩みが、これまでの三河教育の多大なる成果や実績につながっていると言えます。

自分の教員としての歩みを振り返ると、六年目に市の代表として三河教育研究会社会科夏季研修会で実践発表する授業に取り組んだことが大きな力となりました。様々な指導を受けながら、単元を通して研究的に実践をやり遂げ、授業に対する意識もレベルも高まったと実感できました。

そんな自分が、三河教育研究会の授業力養成講座の講師をしたことがあります。自分と同じように、六年目の先生の実践

にかかりました。地域素材を教材化し、子どもを中心に据えた社会科の授業実践でした。レベルアップを求めて、探求心旺盛な授業者や参加者とともに研究を深めることができました。

若かりし頃、学ばせていただいた自分が、今度は助言者として若い先生の授業実践をサポートし、授業力向上にかかわることができました。これも、脈々と受け継がれている研究活動の一つであります。各部会・委員会を取り組まれている地道な取り組みが、今日まで三河教育研究会を支えている大きな要因の一つではないかと思っています。

今日の社会は先行き不透明であり、子どもを取り巻く環境は、課題が山積しています。「不易と流行」と言われますが、大きく社会が変化する中、新しい教育に対応するとともに、よりよい三河教育研究会のあり方を常に模索していくことが必要だと思っています。また、これまで築き上げてきた三河の風土に根ざした歩みを大切にしていく面も必要です。学校現場のことを考え、より質の高い教育を目指して、地道に取り組んでいくことが求められます。三河地区の小中学校教育のさらなる充実・発展を大いに期待したいものです。

各地の教育を牽引する原動力

知立市立知立南中学校

淵上 隆博

本市事業の一つに「授業力向上プロジェクト」があります。本プロジェクトは、不登校・いじめ問題の対策として、子どもと教師の好ましい人間関係を構築するという考えのもと、「絆」を大切にした学級づくりや「自己存在感」「学びの楽しさ」が実感できる授業実践をめざしています。

この「授業力向上プロジェクト」には、毎年、十名から十二名の中堅及び若手教員が参加し、十月から十一月に授業研究会を実施しています。こうした、中堅及び若手教員の熱意ある活動を見るにつけ、これからの本市の教育を牽引していく原動力として頼もしく感じています。

一方、三河教育研究会では授業力養成講座が開講されています。本市の小中学校も、平成二十六年度に会場校となり、多くの教員が授業力向上に向けて学び、大きな刺激を受けました。プロジェクトのメンバーの中にも、本講座から学び、プロジェクトの活動に生かすことができたと教員も少なくありません。

こうした三河教育研究会の取り組みが、様々な刺激と情報を提供することにより、各市町村の教育を牽引していく原動力となる教員の資質並びに授業力向上に繋げられるよう、更に発展されることを期待したいものです。

「まほこのぬ」を織りなすために

豊根村立豊根小学校

伊藤 綾美

本年度、国語部の夏季研修会で提案させていただく機会を得ました。提案に向けて熱心に指導してくださった先生方との出会いがありました。さらに、算数・数学部の夏季研修会にも参加しました。どちらの会でも、以前勤めていた地区でお世話になった先輩との再会がありました。また、同時期に国語部の地区委員をしていた先生との再会もありました。

学級づくり、授業づくりについて、教えを乞うことができる先輩、共に悩むことができる同輩が存在することは、とても心強いことです。それが、自分の勤める地区にとどまらず、他地区にも存在するならなおさらです。本年度は私にとつて、縦と横のつながりを強く感じた一年でした。

さて、小学二年国語科の教科書に「ふろしきは、どんなぬ」という説明的な文章があります。そこには、「ふろしきは、まるでまほこのぬのようです。」という文が出てきます。風呂敷は、形状を問わず、さまざまなものを包むことができます。それは、縦糸と横糸で織り上げられた布を素材にしているからです。三河教育研究会が、子どもを優しく包む「まほこのぬ」であり続けるために、今後とも研鑽を積んで参りたいと思います。

平成二十九・三十年代 実践事例集

『これからの道徳教育に向けて』

― 自他を大切にし、心豊かに生きる子の育成 ―

調査委員会

三河教育研究会では、調査委員会を中心に、諸事業の推進や、諸活動の充実を図るために主題を設定し、二年間の調査・研究を進めています。平成二十七年から二十八年度にかけては、「子ども」の主体的な学びを支える教育・仲間とともに、主体的に問題を解決する子の育成」を主題とし、実践事例集にまとめられました。

平成二十九年度は、新たなテーマを設定し、平成三十年度にかけての二年間を通じた実践の成果と課題を、学校現場へ還元していきたいと考えています。

そこで、教育の今日的な課題や、三河各地の学校現場の実情から、主題および副題を検討していくために調査をしました。各支部からは次のような多くのキーワードが寄せられました。

【地区から寄せられたキーワード】

- ・ 特別の教科 道徳
- ・ 豊かな心、人間形成
- ・ 主体的な学び
- ・ 学びの質、深まり
- ・ 社会に開かれた教育課程
- ・ 人権教育

- ・ 不登校
- ・ 発達障害
- ・ 問題解決的な学習場面

また、各支部の声の中には、次のような「育てたい子ども」の姿が見られました。

【育てたい子ども】

- ・ 心豊かに生きる子
- ・ 主体的に活動し、深い学びを求める子
- ・ 社会との関わりを大切にする子
- ・ 自他を大切にし、ともに学び合う子
- ・ 自ら問題を見つけ、解決に向けて動き出す子

私たちは、「三河の風土に根ざし、子どもを中心に据えた教育を実践する」「子どもの生活を変える学びを創造する」を三河教育の理念として掲げ、半世紀にわたり、子どもの「生きる力」を育んできました。この姿勢は今後も変わることはありません。

また、次期学習指導要領の改訂の視点の一つとして、「特別の教科 道徳」が位置づけられ、小学校では平成三十年四月一日、中学校では平成三十一年四月一日からの完全実施を見越し、「考え、議論する道徳」の授業の在り方を模索していくことが大切になってきます。

私たちは、「特別の教科 道徳」においても、先進的な実践研究を推し進め、これからの道徳教育の在り方を三河の教育が示していくといった自負をもって研究を推進していきたいと考えています。

そこで本年度は、特に道徳の授業に重点を置き、主体的・対話的で深い学び、社会との関わり、指導・評価の一体化を意識した実践をしていきたいと考え、主題を「これからの道徳教育に向けて―自他を大切にし、心豊かに生きる子の育成―」としました。

今後は、次のような日程で、編集を進めようと、計画しています。

【平成三十年度編集日程】

- 四月
 - ・ 調査テーマの確認
 - ・ 各地区代表実践校の確認
 - ・ 執筆者の確認
 - ・ 執筆方法の提示
- 十月
 - ・ 調査結果提出
 - ・ 巻頭言執筆決定・依頼
- 十二月
 - ・ 原稿整理
- 一月
 - ・ 原稿渡し（印刷・製本へ）
 - ・ 実践事例集完成

- 二月
 - ・ 調査結果報告
 - ・ 実践事例集配付

本事例集には、三河の各支部における、小学校・中学校の実践事例を掲載していきます。

どの支部においても、「三河の風土に根ざし、子どもを中心に据えた教育を実践する」「子どもの生活を変える学びを創造する」といった私たちの共通理念は、目の前の子どもや、地域の実態を大切にしたいそれぞれの実践の中に、息づいています。それら各地区の価値ある実践を具体的な形で残すことによって、私たち教員の資質、能力のさらなる向上へと結びつけていくことができるようにしていきます。

道徳教育の実践は、これまでも力を入れて取り組んでいることと思います。各支部の渾身の実践を掲載していきます。平成三十一年二月の発行に向け、調査を進めていきます。

会員の皆様、今後とも、ご理解とご協力をよろしく願います。



〈報告〉

授業力養成講座

～中堅教員のミドルリーダーとしての資質向上をめざして～

授業力養成講座Ⅰ

【東三河】

○期日 八月二十三日（水）

会場 蒲郡市民会館

講師

元豊田市立小清水小学校校長 前田 勝洋 先生

「授業づくりの知恵とワザ」社会科の場合」
愛知教育大学生活科教育講座教授 野田 敦敬 先生

受講者 五十二名

【西三河】

○期日 八月二十五日（金）

会場 安城市教育センター

講師

西尾市立西野町小学校校長 石川 雅春 先生

「柔らかに優しい道徳の教室を求めて」
豊田市立下山中学校長 野田 靖 先生

「楽しく深い学びのある国語の授業」
岡崎市立六ツ美西部小学校校長 小田 英宣 先生

受講者 七十四名

本年度も魅力あふれる講師の先生方をお招きし、講座Ⅰでは授業づくりに対する実践的な研究理論について学びました。講師の先生方からは、子どもの捉え方をはじめ、学びへの意欲を育てる授業づくり、子どもが主体的に学び合う教材や学習環境づくり、子どもがかかわり合うための教師の発問の仕方などについてご

指導いただきました。

また、具体的な教材を用いた授業構想、授業場面での具体的な教師支援の在り方などをも学び、二期の実際の授業ですぐに役立つ価値ある学びを得ることができました。



講師の先生の話をお聴く受講者

【受講者の声】

・国語科としてよい授業をつくるために、叙述を根拠に主体的に子ども同士がかかわり合えるようにすること、その中でも「黄色いバケツ」の教材をもとに、一つ一つの言葉を大切に引き上げ、動作化するまでの具体的な指導法を学ばせていただいた。
・ねらいに迫るために発問を工夫したり、展開を柔軟に構想したりしていくことが大切だと改めて実感した。また、教師が子どもを理解し、受け止めていくことが重要と聞き、そのような道徳の授業の積み重ねで子どもの道徳性が養われていき、子ども自身が将来の生き方や自己を見つめ、どうしていきたくか考えられるのだと思った。

授業力養成講座Ⅱ

【東三河】

○期日 十月十七日（火）

会場 田原市立田原中部小学校

講師

田原市立田原中部小学校 鳥居 達也 先生（四年 社会科）

ファシリテーター・アドバイザー
元豊田市立小清水小学校校長 前田 勝洋 先生

受講者 三十八名

【西三河】

○期日 十一月二十八日（火）

会場 安城市立錦町小学校

講師

安城市立錦町小学校 堀岡 真央 先生（六年 体育科）

ファシリテーター・アドバイザー
岡崎市立六ツ美西部小学校校長 小田 英宣 先生

受講者 十九名

○期日 十一月二十九日（水）

会場 安城市立篠田中学校

講師

安城市立篠田中学校 山中 圭司 先生（二年 道徳）

ファシリテーター・アドバイザー
西尾市立西野町小学校校長 石川 雅春 先生

受講者 三十九名

○期日 十二月六日（水）

会場 安城市立二本木小学校

講師

安城市立二本木小学校 渡瀬 力斗 先生（六年 国語科）

ファシリテーター・アドバイザー
豊田市立下山中学校校長 野田 靖 先生

講座Ⅱでは、東三河二名・西三河三名の先生方の授業を参観し、授業研究協議会を通して授業の在り方について議論しました。

講座Ⅰでの講義をもとに、実際に授業を参観し、授業協議会を通して研修しました。教師の働きかけと子どもの変容をもとに、単元・授業について意見交流を行いました。



白熱した議論を交わす受講者

【受講者の声】

・講座Ⅰでは、学習指導要領の見方・扱い方を教えていただき、自分の足りなさに気づいた。授業を行う際に、目の前にある問題だけでなく、この先今の学習をどのようにつなげていくのかを考えるようになった。
・子どもの思いや願いを大切にすることの意義を実感した。子どもが楽しんで主体的に学べるような教材や流れを考えたい。また、市内の研修では出会えない先生方と語り合えたことも大きな収穫であった。

ご指導いただきました講師の先生方、また、授業公開していただきました田原市立田原中部小学校、安城市立錦町小学校・篠田中学校・二本木小学校に心より感謝いたします。

受講された先生方が、各学校及び地区における授業力向上の推進役となり、一層活躍されることを期待しています。

部会・各種委員会

研究大会の報告

社会

社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかわりながら問題の解決を図る社会科の授業(最終年次)

愛知県社会科教育研究大会

期 日 十月二十四日(火)

場 所 田原市立東部中学校

田原市立田原東部小学校

田原市立神戸小学校

参加者 四百十六名

愛知県社会科教育研究大会は、三河と尾張で一年おきに開催されています。本年度は、田原市を会場として開催しました。田原東部小学校と神戸小学校では、三年生から六年生までの各学年二学級の十六授業

東部中学校では、一年生から三年までの三授業を公開していただきました。授業では、地域教材をもとに、歴史や伝統、また、現在の地域の抱える諸問題などを取り上げた単元が構想されました。問題を見つけた子どもが、学級の仲間や地域社会に生きる人とかかわり合いを通して学びを深めていこうとする姿が随所に見られ



公開授業の様子

ました。研究主題を受けて、確かな実践を積み上げられていることを実感しました。

公開授業の後は、東部中学校を会場として、小学校六つ、中学校三つに分かれて分科会が行われました。各地区から十八の実践が提案され、参加者の熱心な協議が展開されました。

社会部会では、四年間の計画で研究主題を設定しています。第十四期の研究主題の最終年次にあたる今年度は、研究主題を踏まえた確かな実践から見えてきた成果や課題が各分科会で報告されました。「社会参画」「仲間とのかかわり」などをキーワードとして、活発な協議が行われました。

提案者として参加して

新城・舟着小 新川 裕人

愛社研大会で実践を提案させていただく機会を通して、子どもたちに身近な、地域の人に焦点をあてた教材を取り上げ、授業を展開しました。子どもたちは、野菜作りを営む人とかかわりを通して、野菜作りの苦労や努力に目を向けていく姿を見せました。分科会では、提案に対して共感する多くの先生方の意見を聞き、あらためて子どもが身近な人にかかわること、学びの意欲を高め、調べたり考えたりすることを実感しました。今後、このような学習につながる地域教材を見つけたいと感じました。

音楽

豊かに感じ 表現する子
ともに学び、
ともに楽しむ音楽の授業

愛知県小中学校音楽教育研究大会

期 日 十月二十四日(火)「蒲郡大会」

場 所 蒲郡市立蒲郡北部小学校

参加者 三百名

公開授業 蒲郡北部小学校

全体会
蒲郡市音楽部会実践報告(中学校)
指導講師
岐阜市立加納西小学校校長
中村 美雪 先生
記念講演
筑波大学附属小学校
高倉 弘光 先生

本年度は、蒲郡市において、愛知県小中学校音楽教育研究大会を開催しました。

音楽が専門の先生だけでなく、すべての先生とともに音楽科の授業の在り方について考え、一年生から六年生まで、全学年の音楽科の授業を公開しました。どの学年も、表現と鑑賞の相互関連を図る魅力ある題材を構想し、実践を行いました。蒲郡市音楽部会は、平成二十七年から蒲郡市の小中学校において音楽の実践研究を続けてきました。

本研究では、よりよい人間関係の中で互いの歌や演奏を聴き合いながら、音楽づくりや音楽表現を工夫したり、演奏を

楽しんだりする子どもの姿を引き出すことをねらいとしました。

公開授業では、少人数グループでの練習や話し合いを通して考えを深めていく姿や他グループの演奏を聴いて、強弱や音の重なりなど、音楽の諸要素がもたらす効果に気づき、積極的に意見を交わす姿が多く見られました。どの学級も、あたたかい雰囲気の中でともに音楽を楽しむ姿が見られました。

指導講師と記念講演では、新学習指導要領の展望と創作・鑑賞授業の在り方について考え、参加者全員で歌ったり踊ったりしながら学ぶ機会となりました。子どもたちが日常的に音楽活動に親しみ、心と体で感じる音楽教育を推進することの大切さを実感した大会となりました。



高倉先生記念講演の様子

蒲郡大会に参加して

豊田・寺部小 蕃 洋一郎

「無意識を意識化する教師の発問の工夫が重要である」という高倉先生のお言葉が心に残りました。音楽の諸要素を体感しながら学び、聴く力を高めることで子どもは、より深く音楽の構造を認識できるというお話でした。蒲郡北部小学校の子どもたちは、目を輝かせながら演奏を聴いたり意見を交わしたりしており、研究に取り組まれた先生方の思いが、子どもの姿になって表れていたことを実感しました。

造 形

子どもの思いが広がる造形教育

愛知県造形教育研究会総会並びに
第五十四回愛知県造形教育研究協議会
期 日 十一月八日（水）
場 所 刈谷市総合文化センター
参加者 二百二十二名

研究発表（三河部）

○「一人一人のよさを認め合い、表現の喜びを味わう子の育成」
—小四『にじんで広がる色の世界』—
『今池タノシクナーレ』石ころ大変身』の実践を通して—
安城市立今池小学校 齊藤みゆき 先生

○「見方や感じ方を広げながら、イメージを明確にして表現する生徒の育成」
—中三『私のオリジナル〇〇シリールズ切手』の実践を通して—
刈谷市立依佐美中学校 三浦 英生 先生

講演

「子どもの表現活動と教師の役割」
—新学習指導要領をふまえて—
講師
愛知教育大学教授 竹井 史 先生

愛知県下の小・中学校より二百名以上の参加があり、盛況のうちに開催することができました。三河部からは二名の先生が発表をしました。今池小学校の齊藤みゆき先生の実践では、自分の学校でもやってみたいという声や、依佐美中学校の三浦英生先生の実践からは、切手という素材に大変魅力を感じるなどと、参加

者の方々から好評を得ました。

その後の研究協議では、発表者・

参加者の間で、学習展開や子ども

の考え方について活発な意見交換が行われました。

講演では、愛知教育大学教授の竹井史先生から「子どもの表現活動と教師の役割」と題して、新学習指導要領を踏まえた教材研究の大切さについてお話をいただきました。

本研究会には、三河地区から多くの先生のご協力をいただきました。関係の方々に厚くお礼申し上げます。

参加者の声

豊橋・南陽中 松橋 克

研究発表会では各地域から多くの実践が発表されました。どの発表も子どもの実態に合った興味深い実践ばかりでした。どの実践にも共通していたことは、これまで教師が学んできたことを活かして単元を構想するだけではなく、活動の中に話し合いの場を設けることで「深い学び」となることがわかりました。また、講演会では、新学習指導要領について丁寧に解説していただきました。私たち教師が子どもたちの資質・能力を育むための三つの柱となる三観点を理解し、子どもたちに還元できるよう日々努力し、全力で取り組んでいきたいと思っています。



講演をされる竹井先生

英語（外国語活動）

心豊かな

コミュニケーションをめざって

愛知県英語教育研究大会

期 日 十月二十五日（水）
場 所 岡崎市立六名小学校
岡崎市立竜海中学校
愛知教育大学附属岡崎中学校

参加者 三百三十四名

公開授業

六名小学校 三年 天野 充 先生
六名小学校 六年 伊藤 実穂 先生

六名小学校 六年 村田亜矢子 先生

竜海中学校 一年 武井 翔太 先生

竜海中学校 一年 平川 莉奈 先生

Mr. Adam Rolfsmeier

研究発表

刈谷市立朝日中学校 馬淵 拓夢 先生
新城市立千郷中学校 武田 伸一 先生
みよし市立中部小学校 深谷 良子 先生
豊橋市立岩田小学校 彦坂 悠仁 先生

本年度の愛知県英語教育研究大会が、岡崎市立六名小学校・竜海中学校・愛知教育大学附属岡崎中学校において、盛大に開催されました。

小学校では三年生と六年生の授業が公開されました。三年生は、ハロウィンカードを使って英語でやり取りをする授業、六年生は、旅行会社の設定で、外国の人におすすめの場所を紹介する授業が行われました。中学校では一年生と六名小六年生による小中交流の授業と、JTEとALTで行うGCTの授業が公開されました。小中交流では、中学生が小学生に

学区のよさや特徴を英語で説明する授業、GCTでは、

宇宙人にオリジナル料理を作ろうという楽しい設定の授

業が行われました。参加者からは、「子どもが意欲的に英語を使っている」「自分の授業でもジェスチャーをもっと取り入れていきたい」という声が聞かれました。

研究発表の分科会も大盛況で、それぞれの先生方の提案に対し、鋭い質問や意見が飛び交いました。特に小学校では、教科化される英語の授業についての議論が交わされました。

愛知県英語教育研究大会に参加して

岡崎・東海中 梅岡 知充

本大会に向けて、小学校外国語活動やALTとJTEで行うオールイングリッシュの授業「GCT（Global Communication Time）」の取り組みを生かし、「話すこと（やりとり型・発表型）」に重点をおいた授業改善を進めてきました。さまざまな手立てを講じた授業の中で、知っている単語を積極的に発話する児童や、習った表現や文法を使って思いを伝え合う生徒の姿が見られました。今後も、本市のこれらの活動を継続していき、「英語が話せるおかざきっ子」を育てていきたいと思っています。



質問に答える武井先生

道 徳

豊かな心をもち、他者と共によりよく
生きる子どもを育む道徳教育

第五十五回愛知県道徳教育研究大会岡崎大会

期 日 十一月八日（水）

場 所 岡崎市立竜美丘小学校

参加者 五百四十六名

公開授業 竜美丘小学校全学級

分科会 小学校低・中・高学年、
中学校 計四分科会

記念講演 「豊かな心で考え議論する
道徳授業の在り方」

講師 岐阜大学大学院

准教授 柳沼 良太 先生

愛知県道徳教育研究大会は、三河地区を中心に、五百名を超える先生方に参加していただき、「特別の教科 道徳」の完全実施の直前に、有意義な会となりました。

はじめに、四つの分科会で提案、協議が行われました。ロールプレイングを取り入れた授業や評価の在り方に対する実践などが提案されました。質疑応答の場では、参加者の先生の授業における悩みが話し合われる場面もあり、貴重な学びの場となりました。

続いて、竜美丘小学校の全学級で、道徳の授業公開が行われました。子どもの意識を大切にした発問をもとに、活発な話し合いが展開されました。また、授業

者の切り返しの発問や構造的な板書の工夫から、参加された先生方からは、学校に帰ってすぐに実践したいという声が多く聞かれました。

記念講演では、「豊かな心で考え議論する道徳授業の在り方」を演題に、考え

議論する道

徳の第一人

者である柳

沼良太先生

より、これ

からの道徳

教育につい

てお話をい

ただしまし

た。道徳教

育における

主体的、対

話的な学び

や、評価の

在り方等につ

いても多く

の示唆をい

ただしまし

た。



柳沼先生のご講演

特別の教科 道徳の実施に向けて

幸田・幸田小 志賀 政子

分科会での各地区の先生方の発表や竜美丘小の授業を参観し、目の前の子どもたちに合った授業形態を考え、展開を工夫していく大切さを学びました。記念講演では、柳沼先生から「考え議論する道徳」の指導法や学習過程についてのお話がありました。来年度から実施される「特別の教科 道徳」に向け、さらに日々の授業を充実させていきたいと思うよい機会となりました。

生徒指導

豊かな心と社会性を育む
生徒指導をめざして

愛知県生徒指導研究大会

期 日 十一月二十九日（水）

場 所 名古屋文理大学文化フォーラム

参加者 七百五十三名

研究発表

○困難に立ち向かい乗り越えようとするレジリエンス力の育成を目指して

○他者とのかわり合いの中で自己肯定感・自己有用感を高め、自分たちの生活をよりよくしようとする生徒の育成

○自己指導力を育成する生徒指導指導高評

愛知県教育委員会

義務教育課 主席指導主事

山田 昌弘 先生

本年度の愛知県生徒指導研究大会は、尾張地区の担当で、稲沢市の名古屋文理大学文化フォーラムにて開催されました。研究発表では、三河・尾張・高校で、それぞれ一名の先生が発表されました。三河ブロックからは、刈谷市立朝日中学校の中村雅志先生が、生徒が主体となつて活躍できる、生徒会活動を中心とした特別活動と生徒指導を連携させるこ

とで、生徒の自

己肯定感や自己

有用感を高め、

生徒自らが生活

をよりよくして

いこうとするこ

とを目指した実

践を発表されま

した。また、紙

上発表として、

幸田町立荻谷小

学校の山本哲寛先生が「自ら考え、仲間

とかかわり合いながら、主体的に活動す

る子どもの育成」、新城市立東郷中学校

の尾崎達也先生が「全校体制で取り組む

不登校生徒への対応」と題し、大会に寄

稿されました。

主体性が生み出す力

岡崎・新香山中 及川 博之

研究大会では、小・中・高の実践が発表され、協議されました。それぞれの発達段階に応じて、起きる問題もかわりも違う中で、共通の認識をもつて指導を心掛けたいと考えた時、その共通するものは「主体性」だと発表者の方々の実践から感じました。どの実践においても、押し付ける、一方的に与える指導ではなく、主体性を育て、その力から児童生徒に自ら決定をさせ、そうして鍛えられた力は、豊かな心と社会性を育むと学びました。

この研究大会では学ぶものが多くあり、有意義な機会となりました。



発表を受けての研究協議

統計教育

生きる力を育てる統計教育

愛知県統計教育研究発表会・講演会
期 日 十一月二十九日（水）
場 所 日本特殊陶業市民会館
参加者 七十三名
研究発表会
提案者

一宮・北方中 寺澤 正一 先生
名古屋・上野小 中村 祐太 先生
安城・安城南中 石本 敢大 先生
指導講評・講演会

「新学習指導要領における統計教育
への期待と授業化のポイント」
講師 愛知教育大学准教授
青山 和裕 先生

愛知県統計教育研究発表会・講演会が、日本特殊陶業市民会館で開催されました。本年度の開催は、名古屋地区が担当し、各地より七十三名の参加者を得て有意義な会となりました。

研究発表会では、尾張地区から数学の実践、名古屋地区からは特別活動の実践、そして、三河地区からは、算数の実践を通して、統計的手法を生かしながら日常的な事象を問題解決していく内容が報告されました。資料となるデータを集め、表やグラフなどに分類・整理し、特徴や傾向を読み取る活動は、決まった正答が存在するわけではなく、授業を通して、その方向性が定まってい、子どもと教



講演をされる青山先生

師でつくる、まさに生きた学びであると感じられる実践でした。

愛知教育大学の青山和裕先生の講演では、海外の企

業では、データをどう扱うかが注視されており、日本でも統計学を学ぶ人材の育成に力を入れ始めていることや、その素地となる部分を統計教育が担う必要があるという現状を教えていただきました。授業化のポイントとして、追究の方向性を教師が見通しをもつて活動を進めていくために、その第一歩として既存のデータを利用することも大切であるとの助言をいただきました。

研究発表会・講演会に参加して

岡崎・矢作北小 松金 正樹

今後の社会では、統計を分析できる人材が求められ、新学習指導要領においても、「統計教育の重視」が言われています。三名の先生方の実践発表を聞いて、統計教育の重要性をより感じることができました。また、青山先生の講演では、子どもたちがデータに基づいて問題解決や意思決定につなげた結果を批判的に考察したりする力が必要であると学びました。これから我々教師が、統計教育の内容を意識した実践を進んで行い、子どもたちの未来に生きる力を育てていきたいです。

へき地教育

ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子どもの育成

第五十五回愛知県へき地教育研究大会
期 日 十月二十四日（火）
会 場 豊根村立豊根小学校
参加者 百六十四名
公開授業 七学級
全体会

○基調報告「第Ⅳ次研究推進計画」

へき地教育研究協議会研究部
○研究推進状況報告（二期一学級）

豊田市立花山小学校
南知多町立日間賀小・中学校
岡崎市立宮崎小学校

第Ⅳ次研究の二期一学級の研究大会を参観校方式にて開催しました。会場校の公開授業と本年度から研究委嘱を受けていただいた右記の三地区四校の研究推進状況報告を通して、これからの愛知のへき地教育の在り方を学び合う場となりました。

アトラクションでは、豊根小全校児童四十三名の美しい歌声を聴き、低学年の子が、これほどまで自分の歌声、発音に気を付けて歌えるもののかと感動しました。和太鼓「源流怒涛太鼓」は、高学年の子どもたちの息の合った演舞とも言える演奏でした。

公開授業では、少人数でも、学びを深

めていける児童の育成を目指して支援を工夫する先生方と、自ら学ぼうとする子どもの姿を参観させていただきました。

基調報告では、第Ⅳ次研究一学級実践の成果と課題を明確にして、二期検証集約に向けた研究の方向性を示しました。

花山小学校の地域教材を生かしつつかわりを重視した授業づくり、日間賀小・中学校の対話による問題解決能力の育成や、生徒主体の目標設定と振り返りを重視した協働の場づくり、宮崎小学校の児童一人一人の思いや考えを生かした語り合いを通した深い学びについての報告がありました。活発な質疑応答がなされ、充実した大会となりました。

友達と学ぶ

北設・設楽中 堂地 志帆

五人だけの三年生。みんなが納得して次に進めるようにと、交代で説明していました。「僕、ここまでではできたよ。」「分からなくなったから、〇〇ちゃん、続き言って。」授業はみんなで作るものだということを、子どもたちの姿から学びました。担任の先生が、一緒に悩んだり、考えたりすることも、子どもたちが一生懸命学ぼうとする姿勢につながっていると思いました。



アトラクション全校合唱

校紹介

人が好き 自分が好き 金中が好き

～RSを核にした学校づくり～

豊川市立金屋中学校

春になると、学校の隣を流れる佐奈川沿いの桜並木が満開になり、菜の花と重なり合って美しい光景を見せてくれます。本校は、全校生徒数四百八十三名、ゆるキャラ「かなやん。」をはじめ、温かく笑顔にあふれた学校です。

本校は長い間、R（共感的人間関係）とS（自己存在感）を柱として学校づくりをしてきました。三年前より豊川市教育委員会の委嘱を受け、研究主題を「人が好き 自分が好き 金中が好き」と設定し、今まで大切にしてきたRSを核として、人間関係づくりを土台にした研究を進めてきました。

よりよい集団をつくるために、全校でクラス会議を定期的に行いました。クラス会議は、友達の素敵など伝える「アイスメッセージ」から始まり、学級で困っていることや相談したいことを議題として話し合います。一人一つ意見を出すことで、問題解決に向かう思考を育てるとともに、どの意見も大切にする気持ちも育ててきました。

授業では、かわり合いを通して学びを深められるよう、学習課題の工夫や場の設定に心がけました。生徒一人一人の持ち味を発揮しながら個性を響き合わせ



クラス会議「なるほどね！」

るよう、効果的な交流の方法を選び、実践しました。考えの幅を広げ、深めるような発問も工夫しました。また、総合的な学習の時間として、アントレプレナー学習を行いました。人とかかわりを通して、自分を見つめ、よさや個性に気づかせるために一人一役を担い、商品開発からプレゼンまでの活動を行っています。このような取り組みにより、学校生活のあらゆる面で生徒が笑顔になり、生き生きと取り組む姿が多く見られるようになりました。（文責・田中美穂）※詳しくは金屋中学校ホームページをご覧ください。

学校慢

豊かな自然や
地域の人々とかかわりを大切にして

豊橋市立石巻中学校

本校の敷地の垣根の一部分はチャノキになっています。これは昭和三年に本校が農業後継者を養成するための「石巻公民学校」として開校した際に農業実習の一環として茶摘みを行うために植えられたのが始まりです。その後、道路の拡張工事で一部分が失われましたが、今でも毎年八十八夜の頃には、全校生徒で茶摘みを行っています。

また、平成十三年度からは、「自分たちの手でお茶を作ってみよう」という生徒の声を受けて、手も茶づくりも始まりました。できたお茶は、給食の時間に味わうだけでなく、パッケージに入れて地



全校生徒による茶摘み

域の方々にも配り、好評を得ています。本校区には、国の史跡となっている「嵩山の蛇穴」や「馬越長火塚古墳群」、天然記念物に指定されている「石巻山石灰岩地植物群落」があり、一年生の総合的な学習の時間のテーマとなっています。

また、石灰岩地植物群落のある石巻山は豊橋を代表する山として市民に親しまれていますが、毎年、ふもとの広場から中腹の駐車場までの距離三キロメートル、標高差百六十メートルを駆け上る「石巻登山マラソン」が行われています。本番前の走路の清掃には、地域のシルバークンが全面的に協力してくださっています。このような地域の方々のご支援のおかげで、この行事は二十五年以上続く、本校の伝統行事となっています。

本校では、こうした地域の方々とのつながりを大切にする意味からも、生徒の地域でのボランティア活動を積極的に勧めています。昨年は四月から十二月の間に延べ四百七十五名の生徒が活動を行い、地域の一員としての役割を果たしました。このように、本校では地域の豊かな自然、そしてそれを大切に守っている人々とかかわりを教育に生かしています。

（文責・原田貴康）

支部 トピックス 刈谷支部

子どもの携帯電話・スマートフォンの 使用について考える

刈谷市立富士松北小学校

刈谷市では、平成二十六年に、刈谷市児童生徒愛護会（市内幼・小・中・高、警察、教育委員会他、関係団体で組織）から、小中学校に向けて、携帯電話・スマートフォンの使用の指針として次のことが示されました。

- 必要のない携帯・スマホは持たせない。
- 親子で使用の約束を結び、契約の際はフィルタリングサービスを受ける。
- 夜九時以降、保護者が携帯・スマホを預かる。

各小中学校では、この指針をもとに、それぞれ独自の取り組みを行っていきます。そこで、その取り組みの一つを紹介しましょう。

ある中学校では、校区にある二つの小学校とともに、「携帯電話・スマートフォン等のよりよい扱い方に向けて」というテーマを設定し、小中で連携した取り組みを行うこととしました。まず、学年ごとに携帯・スマホの使用にかかわる実態調査を行い、その分析から指導のポイントとすべきことを明確化しました。実態調査では、小学四年生から中学三年生までの携帯・スマホの所持率や使用時間、前述の愛護会の指針はどの程度家庭で実践されているかなどを調べました。

そして、各校ではこの結果を受けて、情報モラルの向上をねらいとする子どもに向けた講習会や、携帯・スマホに潜む

危険事例などを示した保護者を対象とした講演会、さらには地域の有識者を交えての懇談会を行いました。

また、一つの中学校

区の小中学校の児童生徒代表が集まって、連携した活動を話し合ったり情報交換をしたりする「児童生徒会サミット」という子どもの会議において、その議題の一つに携帯・スマホの使用に関する事項を取り上げ、意見交換をしました。参加児童生徒は自分たち自身が気をつけていかなければならないという意識が高まり、各校における児童生徒の主体的な活動につながりました。

携帯・スマホは、今後、さらに普及が広がるとともに、使いはじめの低年齢化が進んでいくと考えられます。刈谷市児童生徒愛護会が示した指針が各家庭で守られるよう、各校において、子どもの実態に応じた取り組みを進めていく必要があると考えています。

（文責・太田秀樹）



小中学生による「児童生徒会サミット」

教室の窓から

仲間と自然に学び合う 授業づくり

（創ろう、自分たちが考える博物館）

豊田市立益富中学校

深津 慧太

今年度から中学校で勤務をしています。が、テスト範囲や年間計画に間に合わせようと、教科書の内容を教え込む「教師主導の授業」になってしまっていることがあります。「もっと生徒たちが意欲的に学習する授業をしたい」「生き生きとした姿を見たい」そんな思いが本単元を考える上での出発点でした。

二〇一七年豊田市は、多くの人々に豊田の歴史を発信したい、残したいなどの思いから、博物館を設立することが決定しました。しかし、生徒たちは地域の歴史を学ぶ機会がほとんどなく、郷土の歴史に興味をもつことができません。そこで、豊田市の歴史を調べ、「すごい」と思った歴史を博物館でどのように展示するかについて仲間と一緒に考えることにしました。

導入では、豊田市に博物館ができる背景や豊田の歴史に興味をもたせるために、郷土資料館の学芸員の方を招き、話していただきました。単元の最後に考えた展示を学芸員の方に発表することを伝えると、生徒の目もぐつと変わり、意欲に満ち溢れているようでした。その後は、地域教材をまとめた『はばたく豊田』を活

用し、豊田市の歴史を調べました。聞いたことのない場所や人名に初めは戸惑っている生徒もいましたが、知っている地域名や歴史の出来事と関連していることを知ると、急に身近なことに感じて興味をもち、中には休日を利用して実際に足を運んだ生徒もいました。

その後、展示したい歴史を班で決め、その歴史を伝えるための展示方法を考えていきました。発表する準備の時間になると、生徒たちの意欲も一段と増してきました。「トヨタの車に乗って展示コーナーを回れるようにしよう」「VRを使って江戸時代の町並みを歩ける体験型の展示はどうか」仲間と考えた展示構想を実現させるために生徒たちも必死でした。また、中間発表会を設け、他のグループと意見交流をすることによりよい展示になりました。最初の学芸員の方への発表会では、緊張しながらも自信をもって発表している姿が見られました。

今回の授業づくりを通して、学びを深めるためには、生徒自身の意欲が大切であり、その気持ちを仲間と共有し合うことで、社会的思考が養われることを実感しました。今後も郷土に愛着をもち、仲間と学び合える授業をしていきたいと思っています。



互いにアドバイスをし合う場面

教育随想 (82)

春の風が暖かさを感じさせてくれる季節となりました。今年の干支は戌（イヌ）です。二月四日は立春でした。その前日は節分。皆さんご承知のように一年間のうちに節分は四回ありますが、もともと有名で、様々な行事が行われるのが二月の節分です。

「鬼は外！福は内！」と豆をまいて悪い鬼を追い出しますが、この「鬼」にちなんだ話をします。

鬼は古来から日本人の心の中に存在していました。鬼は陰陽師の「陰（おん）」とか、「隠（おん）」が語源と言われています。どちらも「目に見えない邪気」「この世のものとも思えないもの」です。ですから、元々の鬼は、人間の目には見えないものすごい力をもったものの象徴として存在しました。人々に畏敬の念を生じさせるもので、荒ぶる神、山の精霊、鬼神などと考えられました。よく「勉強の鬼」とか「鬼才」、「仕事の鬼」とか言われる「鬼」は、決して人々を怖がらせるような悪者ではありません。それがいつの頃からか鬼は悪者の代表となってきました。人間の想像を超えた恐ろしい出来事は、みんな鬼の仕業と考えられました。ひとつには、仏教思想によるところが大きいと言われます。極楽に対して亡者が行くのは地獄。その地獄にいるのが鬼。餓鬼、邪念の塊。もともと力をもっているだけに地獄では怖い存在です。何しろ人間を

食べてしまうのですから。

その鬼がやって来るのは北東の方角、これが「鬼門」です。ですから古くから日本の家は北東に玄関を作ることは避けてきました。この北東の方角は、昔の方角によると「ウシトラ」の方角です（図参照）。昔は、方角にも時刻にも干支が当てはめられていました。夜中の二時頃は、ウシの刻。「草木も眠るウシ三つ時」であります。ここで鬼の姿に、ウシの二本の

『戌年は良い年に』

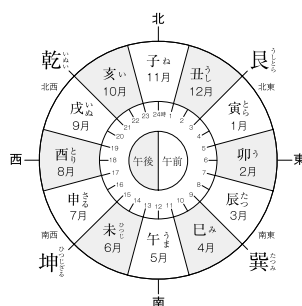


豊川市教育委員会 教育長
高本 訓久

角とトラの皮のパンツがくつつきます。さらに、そこに当時日本にやってきた西洋人等の姿が重なります。赤や青、黒などの肌をした筋骨逞しい大男で、目や鼻が大きくて高い、髪の毛は茶色でチリチリ、いわゆる南蛮人と呼ばれていた人々の姿です。だいたい今の鬼のイメージになってきました。もうひとつ付け加えるならば、鬼はただ怖いだけでなく、どこかユーモラスなところがあるのは、中国の「鬼

（キ）」の思想が混じっているからです。「キ」は、中国では死者の靈魂、亡霊。キョーシのようなもの。人にとりつき祟（た）ると恐れられていました。鬼がやって来る北東には、鬼を封じ込めるために寺を建てて都や城を守らせました。京都御所の北東には、比叡山延暦寺があります。江戸城の北東には、上野の寛永寺があります。一方、北東の反対は南西。こちらは「裏鬼門」。鬼から守りを固めるための方角で、干支でいうと、ヒツジ、サル、トリ。ヒツジは、なかなか日本では馴染みがない動物ということになって、ヒツジの代わりにイヌを入れて、サル、トリ、イヌとなりました。ほうら、これで鬼退治をする有名な話ができあがりました。

こうした鬼に関する話には諸説ありますし、未だ何が正解なのかよくわからないところがあります。私が小学校の担任時代、この時期になるとよく子どもたちに語った高本流の伝承話です。



「渡る世間は鬼ばかり」と、鬼はなに。さて、一八年、二〇河の教育界に「鬼はなし」といきたいものがあります。

- ◆平成29年度各部会・委員会刊行研究集録
 - 理科 平成29年度研究紀要（第39集）
 - 三河の理科教育 いま
 - ―自然を意欲的に追究し、豊かな心と創造力を培う理科学習―
 - 生活 平成29年度 生活科研究No.19
 - 三河の音楽教育
 - 音楽 平成29年度 研究集録 第35集
 - 技術・家庭 二〇一七 英語教育研究集録 第57号
 - 英語 三河の視聴覚教育

編集後記

ここに平成二十九年度の最終号をお届けいたします。この一年間、貴重な原稿をお寄せいただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。また、「教育みかわ」をご愛読くださいました皆様、ありがとうございました。

授業力の向上と日々の実践に結びつく研修・研究の発信源として、三河教育研究会の果たすべき役割は、ますます大きくなってきます。皆様にとって読みやすく、教育活動の質を高め、教職員のさらなる力量向上につながる会報誌となるよう、一層の充実を目指して取り組んでまいります。

表紙の写真

「高浜南中 えんちよこ獅子部」
撮影 高浜市役所

カット

愛知教育大学附属特別支援学校
神谷 宜欣 先生